

## 日本語感 10 (続日本語感 09)

皆様ご愛読ありがとうございます。いよいよ二桁になりました！そしてちょうど日本語感を書きはじめるときっかけとなった映画「おくりびと」をこれから初めて観ます。楽しみです。映画を録画して贈ってくださった Y.O.さん、ありがとうございます！

映画を観始める前に、第十弾を書こうという決断。書かないと観れないという自分への挑戦を自分で打ち立てました。今回は日本語感 09 の続きというか、付け足しです。元氣そうですが、少しおねむ状態。。ヤバヤバ。

### 付け足しパート I. 目力

前回の 09 の感情表現に関して言語聴覚士の Y.O.さんから追加コメントをいただきました。「日本人はたぶん激しく罵倒とかするタイプではないですね。表現力もさることながら、もしかしたら沈黙できるタイプなのかも。だから逆を言えば内にこもる陰湿なところもあると思います。だから、愚痴サロンがいるのでは！？」「あと、あのコントのもう 1 つのポイントは中山さんの『目』ではないでしょうか？『目力』(めぢから)というのか。。よくうちの母が『目は口ほどに物を言う』と言って、私を注意していたけど、あの中山さんの『目』(それ以上、言うてはいけないと訴えるような)を報さんが察知して、黙る。これを慮るのはもしかして日本人の特性！？ 私はあまり外国の方と接したことがないのでよくわかりませんが。。」　そうですね、日本語というか関西弁には「メンチを切る」という言葉があるぐらいですから、目力を使う民族なのかもしれません。言葉以前に「目」だけで相手に感情表現。これも身振り手振りの動きが無いのが特徴的かもしれません。ちなみにスペイン語では「睨む、睨みつける」という意味だけを持つ動詞は無く、「だれだれに敵意の目を向ける」とか「だれだれを厳しい目で見る」という表現が使われるようです。

### 付け足しパート II. 表現力がある場合の弱点～強弱アクセント～肺活量～耳へのダメージ

言葉自体に表現力がある場合の弱点は、声の大きさや表情、ジェスチャーなどはあまり変化させなくてもよいので、肺活量や顔や体の筋肉があまり鍛えられない。また日本語の発音は単純で (<http://homepage1.nifty.com/forty-sixer/hawaigo.htm> を参考してみてください) 強弱アクセントというアクセントは単語には無い。高低アクセントのみがあるようだが、実はそれもあるようでないようなものである。ということは、肺活量がやはり必要でなくなるし、大きな口をあけてしゃべる必用もそれほどないのかもしれない。となると口や舌の筋肉があまり鍛えられない。更に、食べ物は「やわらかいもの！」を好む日本人は嚙む力が外国の方よりも劣っているのでは？ できたら良く嚙んだり、にらめっこなんかをして顔の筋肉を鍛えてほしいものだ。

さて、以前書いたコスタリカの人は大声でしゃべるというのもおそらく強弱アクセントがあるからで、強弱の両方の部分が聴こえないと理解できない。だから弱の部分が相手に聴こえるように話す場合、強の部分の声は大きくなるのも仕方がないのか？。。とも思う。また英語とかオランダ語、ドイツ語、もちろんスペイン語も日本語に比べて子音が多い。子音の発音というのは複雑で母音と同じ声の量を出すのにより肺活量を必用とする。また多くの子音の音はかすれるような音質（高音）のものが多い。例えば‘S’、‘C’、‘T’、‘TS’、‘SH’などである。高音の場合、どうしても長時間聴き続けると耳の奥にある有毛細胞が折れてしまう傾向にあるので、耳にとったら言語的に高音（子音）が少なくまた、強弱アクセントが少ない方が好ましいのであろう。例えば、飛行機の機内での映画の放送などをいくつかのチャンネルで言語選択できる場合、僕はあえて日本語を選ぶ。それがたとえ吹き替えであろうと。。なぜかと言うと、ここで言う強弱のアクセントと子音の聴き取り難さである。飛行機の騒音があるので、やはりイヤホンの音量を上げざるを得ない＝耳にそれだけの負担がかかる。ここでボリュームをそれほど上げなくても聴き取れる日本語を選択することが耳をいたわるのにはふさわしいのではないかと思う。

最後に先ほど触れた肺活量のことでもうひとつ。これはやはり歌唱力にも影響が出てくるのではないかと見る。日本人は全般的にみても、世界的にみても、歌唱力が凄い！という民族ではないのではないかと僕は思う。実際、陽気な歌と踊りが根付いている琉球沖縄の方言には標準語より多くの発音の種類があるのも確かだ。歌が上手い！という方も琉球沖縄方面には比較的が多いのもその発音の種類が多さ（標準語にないものが30種以上もあるという）の影響があるのかもしれない。発音やアクセントが豊富で大きな声で話す言語は、しゃべる時も歌を歌う感覚に近いかも知れない。英語やスペイン語、ロシア語、中国語も本当に発音に注意して、はっきり、くっきり、しっかりと強弱をつけて発音しなければならない。また難しい子音も口の形や唇、舌の位置、喉へちからを入れたりなどなどの技をちゃんと習得しないとイケない。やはりこの肺活量の基礎がそなわっている言語は歌唱力に関しても有利なのかもしれない。また健康面でも普段から肺活量は良好なはずだ。しかし、耳へのダメージはそれなりに比例してしまうのかもしれない。強弱アクセント+高音の子音の大きな声＝聴覚に損傷をきたし易い。聴覚に損傷が起きるとより大きな（強弱アクセント+高音の子音）の声を出さないとイケなくなる（自分にとっても相手にとっても）。。更に大きな声を出すとなると肺活量も更に向上するという利点がある。

肺活量をとるか、耳への損傷を防ぐ方をとるか。。さて、あなたならどちらを選択するでしょうか？（なんちゅう 2 択やねん！！って？）適度な運動やカラオケ？、発声練習などで肺活量を鍛えることをお勧めします。でもくれぐれも大声でしゃべることだけは控えめに。。(^\_^;

2009年10月9日 西田賢司 サンホセ、コスタリカ